

過去最高の参加者で総会開く

“これからも認知症の人と
家族のために”と決意

沖縄県支部を承認
全国に絆つながる

結成35年目を迎え、介護保険を後退させる医療介護総合確保法案の審議が国会で緊迫している最中の6月7日、2014年度の総会が京都市内で開催されました。「安心できる介護保険制度を求める署名」に取組んだ全国の会員が、国会の動きに注目しながら京都に参集しました。

北海道から沖縄県まですべての都道府県から代議員（総数170名）、傍聴者など284名の会員と厚労省、京都府、京都市などからの来賓、マスコミなどを合わせると総勢307名の参加者になりました。過去最高の数字です。

辻村康代職員が司会を務め、昨年の総会以降の物故者に対して黙祷をささげた後、議長に河西美保（兵庫）、伝田景光（長野）代議員を選出して議事に入りました。

あいさつに立った高見国生代表はまず、今総会で沖縄県支部が誕生することになる喜びを述べました。また、理事会が熟慮の末に提案した署名が8万7千を超えることを報告。努力された支部、会員に敬意と感謝を表明し、厚労省老健局長への提出の模様などを述べました。署名の効果については、新潟県支部会報に書かれた金子裕美子代表の、「私たちの思いがすぐにかなうことは難しいかもしれないが、思いを行動で示すこと、国に思いを届ける貴重な経験だった」という文章を紹介し、認知症の人と家族の幸せのためにこれからも努力を続けよう、そのためにつどい、相談、会報の3本柱の活動を大切に、組織も強めようと呼びかけました。

勝田登志子副代表が第1号議案（活動のまとめ）、高見代表が第2号議案（すすめ方）、田部井理事が介護保険・社会保障専門委員会報告を、中期会員目標を中心にした組織・活動専門委員会報告を関理事が



発言する代議員の下野さん（三重県支部）（左）と高井さん（岐阜県支部）

行いました。また、福島県支部から原発事故のその後の状況について特別報告がありました。

ほぼ1時間をとっての討論では、13名の代議員が発言し、署名活動や市町村への意見書

議決の要望活動の経験が出されました。また、2017年度末までに達成する会員目標である中期計画についてその意義が議論されました。その結果、両議案は反対1、保留5～8の圧倒的多数により可決されました。

沖縄県支部を承認する第3号議案は、満場の拍手で承認され、同県からの4名の参加者が紹介され、代表の金武直美さんに「家族の会の理念」の銘板が手渡されました。



支部結成が実現し、高見代表から「理念」の銘板を受け取る沖縄県支部金武代表（右）

13年度決算が三木敦子職員から、14年度予算案が小川正事務局長から報告され、中野篤子監事の監査報告とともに保留2の圧倒的多数で承認されました。

櫻井あかね職員が世界アルツハイマーデーなど今年度の取り組み計画を報告しました。最後に中田妙子理事が、これからの決意や主張を表明する総会アピール（左ページ）を提案し、これからも頑張ろうと訴え、満場の拍手で確認されました。

なお、この総会場で署名の第3次分として1,817名分を来賓として出席していた厚労省認知症対策室の櫻井宏充室長補佐に手渡しました。署名の総数は87,544名分となりました。

総会後の懇親会では、今年度交代した5名の新支部代表が紹介され、青森県支部の4人の参加者が11月の支部代表者会議、全国研究集会にぜひおいでくださいと呼びかけました。



署名の第3次分を厚労省櫻井室長補佐（右）に手渡す（左はあいさつする櫻井氏）

「総合法案は当事者の思いとは真逆、撤回を！」

参議院委員会で勝田副代表が意見を述べる

6月10日に参議院厚生労働委員会で、勝田登志子副代表が参考人として発言しました。勝田副代表は「医療介護総合確保法案は当事者の思いとは真逆であり、オレンジプランとの整合性也没有ありません」と切り出し、消費税アップが提案された時、「従来どおりのサービスが受けられるのなら」という思いであえて反対しなかった。しかし、消費税増税とともに制度の後退が進められようとしており、それに対しては反対の声を上げ、署名にも取り組み、8万7千を超える賛同を得たことも紹介しました。

続いて、7日の総会で決定したアピールも紹介して、安心できる介護保険制度を求める署名で要望した、要支援の人を介護保険から外さないことなどの内容を詳しく話しました。

最後に、「戦後の日本の復興の中心となり平和を取

り戻した高齢者が、路頭に迷うような法案の内容です。お金がないのではなく税金の使い方ではないでしょうか。認知症があっても安心して暮らせるために、今回の法案の撤回を求めます」と結びました。

この後、各党の委員の質問にも答えました。なお、これは、5月13日の衆議院厚生労働委員会での田部井康夫理事の参考人としての意見陳述に続くもので、衆参両院ともに利用者の代表として「家族の会」が選ばれました。



意見を述べる勝田登志子副代表（6月10日、参議院厚生労働委員会、参議院インターネット審議中継から）



田部井理事の

介護給付費分科会レポート ①

昨年の下半期から厚生労働省の社会保障審議会介護給付費分科会に「家族の会」の委員として派遣されています。現在、2015年度の制度改革に向け、いろいろな課題についての議論が進められています。会員の皆さんに知恵をお借りしたいと思い、「分科会レポート」として動きをお知らせすることになりました。

分科会は、医師、研究者、地方自治体、事業者・職能団体の代表など25人の委員で構成されています。数少ない利用者の代表としてがんばりたいと思っています。

●6月11日の分科会

この日は、「家族の会」に直接関係する「認知症施策」がテーマでした。次の3点を意見、質問として発言しました。

(1) 要介護認定について

認知症自立度Ⅱ以上と判断された場合、要介護1となるようシステムを改善すること。認知症を理由に要介護となった場合は、更新時にも要介護が維持されること。

(2) 認知症地域支援推進員、初期集中支援チームについて

オレンジプランの目玉の政策の推進が制度改革により市町村の判断に委ねられることになる。国としてしっかり責任を持ってほしい。

(3) 若年期の認知症の人の居場所作りについて

要望の大きい専用のデイサービスの実現や、既存のサービスの中に受け入れられる条件づくりを考えてほしい。

まだ、はかばかしい回答は得られていませんが、引き続き訴えていきたいと思います。

全体会

『市民と業界専門紙』の力で介護保険を救おう！

シルバー新報記者 吉田乃美さん講演

週刊の介護保険専門誌シルバー新報記者の吉田乃美さんから、介護保険制度についての講演を聞きました。吉田さんはまず記者としての姿勢として、現場から発信されている情報を大切に、記事にしていると話されました。介護の現場をよくするための新聞であるが、これが利用者のためになり、介護保険をよりよくすることにつながると考え伝え続けていると、力を込めて言われたのが印象的でした。

介護保険制度をよくするために必要なことは、「利用者が選ぶこと」で制度は良くなっていく、「選ぶ」とは「これがいいと声を出していく」ことですと述べられました。

私たちが、「思いを署名という声にした」とことと同じで、声の重要性を再認識しました。（報告：鎌田松代）



会場からの質問にこたえる吉田さん

会員さん からの お便り



認知症列車事故、名古屋高裁判決について
7通のお便りが寄せられました。
そのうち2通を紹介します。

悲しい、 くやしい思いです

新潟県・Mさん 68歳 女

認知症の老人の方が、駅構内で事故にあわれた事件の判決の新聞に高見代表の言葉がありました。

何年もかかって、認知症の本人の心を聞く事が大切という事や、徘徊も心のままに止めない方向に進んできた環境がまた、元に戻って閉じ込める方向に進んでしまうのではないかと、老老介護の相手に24時間の目を要求する事がどういう事なのかと、認知症の家族を身近に持つ身には、悲しい、くやしい思いです。

いろいろな所で福祉は後退していくような感じがします。何だか行政やお偉い方々には通じないもどかしさが増した判決でした。

安心な社会を望みます

埼玉県・Aさん

先日、徘徊しても安心な社会を目指す地域づくりという社会の風潮に逆行するような判決が出ています。

85歳の妻に見守りの義務を果たせるでしょうか…。たしかに、電車をとめてしまったことは事実で事故は問題としても、国で

保障はできないのでしょうか。生きている時は安心とその人らしさを守る事を保障できる世の中がくることを望みます。そんな世の中を作らないと！

徘徊による行方不明

福岡県・Sさん 63歳 女

認知症の人の徘徊による行方不明者が一万人近くになるというニュースにヒヤリとした。

独居の母（要介護1）はサービスの入らない日曜日、一人でバスに乗り外出していた。何事もなく帰れたが、確かに家計簿にバス代が計上されていた。本人は「包丁の良いものが欲しいので買いに行く」と言っていた。しかし、訪問看護師さんは杖を歩いてやっと歩いている状態で行く事はないだろうと言っていたので安心していった。「お金が足りなくて買えなかった」と言うので母の行ったというM店に問い合わせると、その店は日曜日は休みで、母の行ったという場所に店はないと言う。調べてもらったが、母に似た人は来ていない。他に包丁を売っている店はない。母はどこへ行ったのか謎のまま。もう何年もバスに乗って買い物に行った事はなかった。バスの乗客も運転手も道行く人も、ヨロヨロと杖をつき歩く認知症の母に気付かなかった。

認知症の人への介護は 『心の鏡』

静岡県・Nさん

実母を我が家に迎えて5年経ちます。現在92歳になり、認知症と診断されて7年目です。

母は当初まだ自立しており、家事を積極的に手伝い大変助かっていました。その後、1年ごとにレベルは低下していき、介護士

だった私は、自分の持てる知識でなんとか症状の進行を遅らせたいとやっきになっていましたが、当然思うような結果になるわけがなく、どうにもならない苛立ちを抱えておりました。そんな自分への嫌悪感と反省の日々の中、昨年暮れ、母は大腿骨を骨折してしまい、長い入院生活を強いられました。その結果、母は笑顔を失い話もしなくなりました。同時に食事を受け付けず、心身の低下は拍車をかけていきました。しかし、胸にCVポート[※]を施術してから劇的な回復を見せ、4ヵ月経過した今年、退院することができました。

車椅子生活になった母ですが、笑顔が増え会話もしてくれるのでホッとして、私も笑顔で返しています。私の心の安定が母に良い影響を与えているのだと感じます。認知症の人への介護は心の鏡と言いますが、改めて実感しています。

※薬の注入口（ポート）付のチューブ。皮膚の下に埋め込んで薬剤を中心静脈に投与するために使用する。

安心して入所できる施設を

神奈川県・Kさん 64歳 男

父が末期がんで死去する3ヵ月前に仕事を辞め、認知症の母をこれまで3年見守ってきました。今年に入り、嚥下障害、ショートステイ先での3回の転倒による頭の怪我、妻の体調の不安定などから、いつまで待っていても入れそうにない特養はあきらめ、近くのグループホームにお願いしようと考えております。

それにしても、在宅介護では夫婦でのゆっくりとした時間を過ごすことは不可能です。ここならば安心して入所させられる施設を探すのも大変なことを痛感しています。自分たちの時間がどんどん流れていってしまうことに危機感を感じているこの頃です。

ぼ〜れぼ〜れ6月号

「老いてなお健康に〜老健局の風」を読んで

認知症の人と家族を守るのか？

大阪府・Sさん 67歳 男

老健局が「老いてなお健康を」めざして、精鋭を揃え地方の現場ともつながった体制と知り、心強いものを感じます。地域医療介護総合確保法として介護保険制度が大きく変わるが、最も気になる点は、高齢化が進み自助・互助の力のない地域でボランティアなどで対応していくことへの危惧です。研修・研鑽している専門職だからこそ支援していけるのに、素人であるボランティアなどでは認知症の症状を早めてしまうのでは…。プロとアマチュアとは違うのです。しかもそのボランティアさえいない地域はどうなるのでしょうか。「老いてなお健康をめざす」と言う老健局なら介護難民を出さないでほしい。介護者が疲弊しないで健康な人生が送れる制度設計を望みます。

「地域づくり」の大切さは分かりますが、地域包括ケアシステムが判らず、不安です。国は地域包括支援センターの強化や認知症地域支援推進員の増員等公助に財源をしつかりと保障していくのでしょうか。



お待ちしております！

■お便りで紹介した人へのお返事を「家族の会」編集委員会宛にお寄せください。

〒602-8143 京都市上京区堀川通丸太町下ル京都社会福祉会館内
FAX.075-811-8188 Eメール office@alzheim.or.jp

131 支部だよりにみる

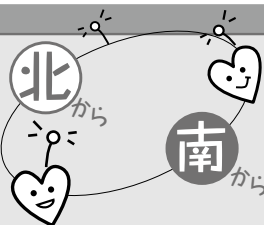
介護体験

今回は
広島県

「母とともに暮らす日々」

東広島地区 竹口幸子

広島支部版
(2014年5月号)



●サービスを利用しながら

朝、母の部屋へ行き「おはよう…」と声をかけカーテンを開け、ベッド上でオムツ交換、着替えをさせ車椅子に移乗しての食事が日課です。実母（87歳）は要介護度5、半身麻痺で寝返りも打てません。少し前までは枕元のトイレまでは全介助で行っていましたが、今はそれもできなくなりました。

週3回のデイサービス、1回の訪問リハビリと訪問看護、そして4月から家庭医の往診を週1回、月に1泊くらいのショートステイを使っています。

●母の病気

病気を振り返りますと、「あれ？」と思ったのは平成21年。当時通院していた病院へ毎朝「薬をもらいに行く」と言い始めました。診断の結果、認知症と判明しても20年近く続けたゲートボールに、それから2年近く通いました。

平成23年3月、家の中で転倒。腰椎圧迫骨折で3ヵ月間の入院から一気に認知症が進行しました。「金を盗られた」などの『物盗られ妄想』に加え、すさまじい周辺症状に振り回されました。興奮すると手当たり次第に食器や家具を投げ、大声で叫ぶ、殴りかかる、かみつくなどの暴力。あれだけ物静かだった母からは想像もつかない姿に変貌し、精神的、肉体的にまいってしまいました。

●介護者への支援

今の介護保険制度では本人への支援はありますが、介護者のサポートは少ないため、認知症と診断された時から、認知症と介護家族の会（東広島市）へ参加し、様々

な症状が出るたびに愚痴をこぼし、支えられました。午前には介護者の悩みを話し、午後からはリラックスできるよう歌って楽しい時間を過ごします。自分一人で抱え込むのではなく、あらゆる制度を使って一日にほんの数分でも自分が自分でいられる時間が介護者には必要であることを、介護を通して学びました。私の場合はオカリナとパソコンです。

最近の母は、少しずつ嚥下が難しくなり、褥瘡の心配も出ています。症状の進行とともに住み慣れた家での過ごし方は人によって違いがあるようです。

●現在の母

在宅療養の良さを、5月に経験しました。来年米寿を迎える母ですが、今年のゴールデンウィークに親族15人で祝いました。母には同じ料理をミキサー食にして食べさせることができましたし、誕生ケーキのロウソクを吹き消す場面では、5歳から10ヵ月の5人のひ孫が、16本のロウソクを競って吹き消してくれ、大爆笑しました。

母は意思を言葉で言える時もありますが、それができない日も出ています。でも表情、態度で私に教えてくれます。これからも、母の温もりを感じながら一緒の時間（とき）を過ごします。





翼のようにばたく若年性のつどい「翼」

宮城県
支部

4月3日のつどいは、「コミュニケーションは挨拶から」「何人とあいさつができるかしら？」とにぎやかに始まり、新年度にしたい活動を話し合い、近場でのレクリエーションとしてお花見、動物園、日帰り温泉などを

決めました。

中には「今の内容、現状で満足！」と世話人にはうれしい声の中で今年度の「翼」の活動がスタートしました。そして、4月27日、「翼合唱団」は利府町の「福祉の町づくり住民の会10周年記念式典」に招かれ、全10曲を26名で歌いました。

「踏切事故控訴審」を支部活動につなげよう！

三重県
支部

4月24日、「認知症踏切事故」控訴審判決を傍聴した下野和子代表は、この判決は「認知症の人が不可抗力で事故や事件を起こした時、その責任をとって介護家族の誰かを人身御供に差し出せということになる」

「支部でも『認知症の人と家族の会』としてこの事例をしっかりと社会に問題提起していきます」と報告しています。

そして、5月17日の支部総会において「踏切事故判決」についてメディアから何度か取材を受けたことが報告され、認知症の人と家族の声を社会に伝えることも支部の果たすべき役割と確認しました。

全研をステップにして支部活動に活力

鳥取県
支部

5月17日、支部総会が開かれ、県認知症フェスティバルと全国研究集会に力を注いだ昨年度を振り返り、10年前は米子市だけだった「つどい」が県内全市町村で開催されることになったと報告されました。今年度の活動として県委託の「若年認知症サポートセンター」の

開設など7つの活動方針が承認されました。センターでは、県内3圏域で若年認知症の人と家族のつどいまたはオレンジカフェを月1回以上開催し、相談活動などを行ないます。

総会後、その第一歩として「若年認知症の理解と支援について」の勉強会が開かれました。

笑いヨガでアッハッハ

高知県
支部

3月15日、高知市比島町公民館で高知笑いヨガクラブの味元哉憲さんを講師に、参加者35名で笑いヨガ実践講座を行いました。

先生のお話によると、脳は作り笑いを認識できず、

笑っているうちに本当に笑えてくる。大きな声で笑うとストレスが解消され免疫力も高まり心も体も健康になるとのことです。本人のつどい「はじめのいっぽ」では、これからも笑いヨガを取り入れた楽しい企画を考えています。その時はまた、ご参加くださいと世話人の田内敏子さんが呼び掛けています。

国際交流委員会発 ネパールの巻

「ケアでつながる地球家族」

■高齢者を守るために施設建設を！

ネパールのアルツハイマー協会の連携組織である高齢者権利擁護団体「エイジング ネパール」から、会報「高齢者の声」が送られてきました。ネパールは人口2650万人、高齢化率は5.07%、平均寿命は68.7歳です。しかし、徐々に高齢化に向かうと同時に、これまでの血縁、地縁による伝統的なケアのシステムが破たんしつつあり、年金も医療も未整備な状態のもとで高齢者の生活リスクが高まっているといわれています。会報には、放置されていた高齢者の死体の数（84件／12年・70件

／13年）、高齢者虐待致死数（52件／12年・35件／13年）が報告されています。また、論説欄は「高齢者福祉法ができ、計画は発表されたが、人材と財源不足により実質的には何も進んでいない。政府は高齢者に財源を使うことは無駄と考えている」と批判し、「これまで家族や地域が行ってきたケアは、社会全体で担うべきで、そのためには施設の建設と高齢者医療の専門的教育が急務である」と主張しています。

施設ケアから在宅ケアへの流れが強調される日本、在宅から施設ケアに向かうネパール。国を超えて、経験や意見を交換し高齢社会の在り方を求めていかなければならないと感じます。

（国際交流委員 鷲巢典代）



会報のトップページにある「高齢者虐待ケースの発生状況」を示す地図



仲間と出会い
話したい

今月の本人 全国本人交流会（第15回笹川のつどい） 5/16～18開催

全国本人交流会が富山県の笹川で行われました。東は山形、宮城、西は福岡の全国各地から本人さん10名、ご家族8名、スタッフ9名の合計27名が参加しました。

新緑をわたるさわやかな風と、青い空に映える紅色のシャクナゲが似合う150年の古民家で
はじけました。「朝はどこからくるかしら、あの山こえて野をこえて…おはよう！おはよう！」
朝食前のお口の体操は明るくて楽しい歌声。山形から初参加のTさんのリードで一日が始まり
ました。

「お国自慢大会」では民謡あり、ナツメロあり、炭鉱節はみんなで踊りだす。2泊3日の時間
の共有は「元気」「笑顔」「仲間」「勇気」、なにものにも代えがたい絆となりました。また会お
うね…と絆を胸に、また明日からの活力をもらった参加者でした。次回は10/17～19です。

本人グループの話し合い

山本きみ子さんの進行で本人グループは10人「いま一番やってみたいこと」「家族と一緒に海外旅行」「デート？」「だれと？」「仕事が見たい！給料がほしい！」それぞれの思いが語り合われました。

訴えたいこと（本人グループ）

- 1 認知症があっても自分でできる事は自分でしたい
 - ・認知症の人のサポーターができる
 - ・みんなの役に立ちたい
- 2 チャンスがあれば仕事が見たい（給料がほしい）
 - ・能力にあった仕事が見たい
 - ・会社の理解があれば仕事が見たい
- 3 新薬（根治薬）の開発について
 - ・即時に国が責任をもつこと
 - ・治験については、なるべく多くの人にチャンスがほしい！
- 4 誰でも気軽に集まれる居場所
 - ・認知症の人や介護家族が安心して集まれる居場所
- 5 介護保険について
 - ・要支援外しは反対
 - ・軽度の人こそ介護給付を！
 - ・要介護認定は必ず受けよう！！
- 6 経済的不安をなくすこと
 - ・病院や役所の窓口では、障害年金や医療補助について、わかりやすく説明することを義務づける



本人グループの話し合い中



お国自慢大会

●参加した本人さんからの便り

交流会とても楽しく過ごすことができました。今回も新たな出会いがあり良かったです。特に年齢に近い51歳の方に会えたのが今までなかったので嬉しかったです。ぜひ富

山の家族の会で支えてあげてください。私も宮城の家族の会で同じ認知症の仲間を支えたいと思います。また会える日を楽しみにしております。それまでお互い元気でいましょう。
(宮城県支部 丹野智文)

情報
コーナー

交流の場

青森●8月24日(日) 午後1:30～3:30／若年認知症の人と家族のつどい→弘前社会福祉センター
宮城●8月7日(木)・21日(木) 午前10:30～午後3:00／翼（本人・若年）のつどい→泉社会福祉センター
埼玉●8月27日(水) 午前11:00～午後1:00／若年のつどい・大宮（北区）→地域包括支援センター 諏訪の苑
新潟●8月9日(土) 午後1:30～4:00／下越

若年認知症のつどい→新潟市総合福祉会館
富山●8月2日(土) 午後1:30～3:30／てるてるぼうずの会→サンフォルテ
岐阜●8月17日(日) 午前11:00～午後3:30／各務原市のつどい→ニッケかき野苑
●8月24日(日) 午前11:00～午後2:00／岐阜市のつどい→アルト介護センター長良
滋賀●8月13日(水) 午前10:00～午後2:00／ピアカウンセリング→成人病センター職員会館
京都●8月31日(日) 午後1:30～3:30／若年認知症のつどい→京都社会福祉会館
鳥取●8月23日(土) 午前11:00～午後3:00

／東部につどいの会→コトリ舎
広島●8月2日(土) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会東部→福山すこやかセンター
●8月9日(土) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会広島→中区地域福祉センター
●8月23日(土) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会西部→廿日市市あいプラザ
熊本●8月2日(土) 午後1:00～3:00／若年期認知症のつどい→県認知症コールセンター
大分●8月2日(土) 午後1:30～3:30／若年性認知症のつどい→県社会福祉介護研修センター
詳細は各支部まで

No.259

高見代表の

一筆啓上

金沢駅前の鼓を形どったドームには、北陸新幹線の来春開業を知らせる垂れ幕が下がっていた（6月28日北陸ブロック会議で訪れる。この日は、福井大震災の66回目の記念日でもあった）



会員のみなさんお元気ですか。

6月18日、ついに医療介護総合確保法案が参議院本会議で採決され、賛成135票、反対106票で可決、成立しました。野党は反対、自民党と公明党が賛成しました。

それに先立つ6月10日、衆議院での田部井康夫理事に続いて、勝田登志子副代表が参議院厚生労働委員会で参考人として意見を述べました（5ページ参照）。利用者や家族は大きな不安を抱えていること、厚労省自身が作成したオレンジプランとも矛盾すること、認知症ケアの原則からも間違っていることなどを語りました。会員から、「とても素晴らしかった」とのメールが届いたほど、心がこもり説得力のある発言だと思いましたが、与党の議員には届かなかったようです。しかし、少なくとも全部の野党の議員の心には届きました。

先のメールをくれた人が、「ケアマネジメントの領域から、研究者もケアマネジャーも声を上げていない。これは一体どうなっているのか…。情けないことです」と嘆いていますが、その点、われながら「家族の会」はよく頑張りました。ここ数年にわたり何度もアピールを発表して警鐘を鳴らしてきました。社会保障審議会介護保険部会で、たった一人でも妥協しませんでした。全国の市町村議会にも働きかけました。そして8万7千を超

える署名です。

ここまで「家族の会」が頑張れたのはどうしてでしょう。それは、私たちが純粋に認知症の人と家族の幸せを願っているからです。損得勘定も私利私欲もないから、判断の基準は「認知症の人と家族の幸せ」ただひとつです。だから、誰かの顔色を窺って言葉を濁すこともありませんし、困ることには困ると堂々と言えるのです。

衆参両院から「家族の会」が参考人として招かれたのも、意見は合わなかったけど署名提出をいつも老健局長が受けてくれたことも、「家族の会」のこのような姿勢があったからこそだろうと思っています。

頑張ったけど、法律は成立しました。しかし、「家族の会」はへこたれていません。私たちは生き続けなければならぬし、介護も続けなければならぬからです。これまで頑張ってきたことは、これからの力として蓄えられています。

介護保険制度の後退を取り戻すために引き続き頑張りますし、当面は、今回の後退の中でも認知症が不利益を被らないように、要介護認定の問題、特養ホーム入所の問題を取り上げていきます。会員のみなさん、さあまた一緒に進みましょう。

それでは、また来月まで、がんばってください。

2014.6



理事＆本部事務局活動・業務日誌

●理事・本部活動●

7日★臨時理事会／総会／8日★支部交流会（分科会・全体会）／本人・若年支援専門委員会／10日★参議院厚生労働委員会（東京）勝田◎／11日★厚労省・社保審介護給付費分科会（東京）田部井◎／19日★電話相談月例会／20日★TBSラジオ「生島ヒロシのおはよう一直線」出演 高見◎／会報編集会議／21日～22日★近畿ブロック会議（滋賀）高見◎、芦田・鎌田・坂口・鈴木◎、小川・辻村・櫻井・加賀谷◎／25日★厚労省・社保審介護給付費分科会（東京）田部井◎／26日★石川県人権講演会（石川）高見◎／28日★北陸ブロック会議（石川）高見◎、勝田◎、原◎、辻村◎／29日★杉山孝博Dr.医学講座 岡山会場

●文書等発受●

4日、11日、18日、25日【連絡】支部「事務連絡」

◎／6日【後援承諾】第2回認知症医療介護推進フォーラム（国立長寿医療研究センター）◎／13日【会報】支部【会員】ぼ～れぼ～れ407号 協力：京都府支部◎／17日【後援承諾】第14回気

づきを築くユニットケア全国実践者セミナー（同実行委員会）◎

- 会員数（個人・団体）11,042名・団体（6月15日現在）
- ホームページ訪問者数のべ103,955件（5月1日～31日）
- 本誌発行部数19,000部

事務局

ほっとコーナー



2014年度の定時総会が終わりました。4月から事務局でお世話になっている私にとっては、初めて裏方として総会を支えるという大仕事を終え、今はほっとしている所です。

全国47都道府県の方が一堂に会する機会というのは、なかなか無いと思います。秋田県に10年ほど住んでいた事が

あり、なつかしい東北弁を聞く事も出来ました。皆様方も十分に交流されたと思います。日頃は介護に大変な思いをされている方もいらっしゃるでしょう。私自身も後期高齢者の両親がおり、介護生活目下となってきましたが、「家族の会」のような組織がある事は本当に心強いと思っています。一人でも多くの方に参加して頂けるよう、声をかけていきたいと思っています。今後とも宜しくお願い致します。

（事務局 加賀谷朋子）